

明治期における尖閣諸島への 日本人の進出と古賀辰四郎

平 岡 昭 利

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| I はじめに | からアホウドリへ |
| II 尖閣諸島の調査と日本人の進出 | IV 尖閣諸島の産業の変遷と集落 |
| III 古賀辰四郎の尖閣諸島への進出過程 | (1) アホウドリの激減と学術調査 |
| (1) 顕彰碑の碑文と尖閣諸島探検の
信憑性 | (2) アホウドリから剥製業・鰹漁業へ |
| (2) ヤコウガイの採取と古賀辰四郎 | (3) 古賀村の形成と崩壊 |
| (3) 尖閣諸島への進出—ヤコウガイ | V おわりに |

キーワード：行為目的、アホウドリ、尖閣諸島、無人島、ヤコウガイ

I はじめに

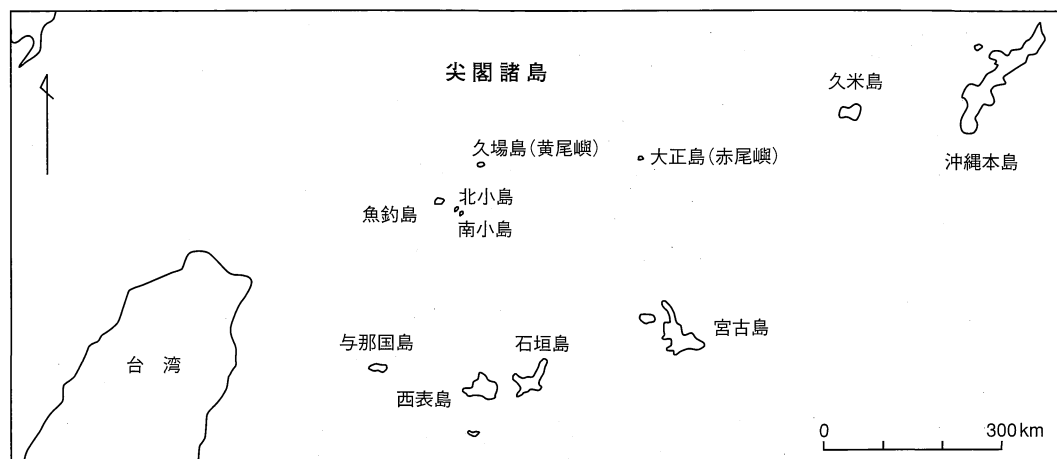
尖閣諸島は、沖縄県八重山諸島の北方約170 kmに散在する無人島で(第1図)、古くからその存在は知られていたが、日本人の領有行動は明治期までみられなかった。1885(明治18)年に沖縄県が尖閣諸島を調査し、その後、多くの日本人が進出、明治政府は1896(明治29)年になって沖縄県八重山郡に編入した。

これまで尖閣諸島に関する研究は、開拓当初の状況を視察した宮島や黒岩による報告を除い

て、大半が領土問題の考察に終始してきた³⁾。その背景として、この地域は1968(昭和43)年に石油や天然ガスの埋蔵の可能性が高いと報告されてから、中国や台湾が領有権を主張したため領土問題がクローズアップされてきたという事情がある。しかしながら、なぜ明治期に日本人が岩ばかりの無人島に進出したのかなどについては、これまで十分に検討されることはなかった。すなわち、尖閣諸島に関する行為論的な問題把握⁴⁾は行われてこなかったといえる。

また、尖閣諸島の借用願いを国に申し出て開

- 琉球王府は、1372年以降、中国へ進貢船を派遣しており、福建省と那覇の間に存在する尖閣諸島は、航海上の標識となり広く知られていた。
- ①宮島幹之助「沖縄県下無人島探検談」地学雑誌142, 1900, 585-596頁。②宮島幹之助「黄尾島」地学雑誌143, 1900, 647-652頁。144, 1900, 689-700頁。145, 1901, 12-18頁。146, 1901, 79-93頁。③黒岩恒「尖閣列島探検記事」地学雑誌140, 1900, 476-483頁。141, 1900, 528-543頁。
- 領土問題に関する文献は非常に多いため、参考文献として本稿では以下の書誌的な書物や史料を収録した雑誌に留めた。①浦野起央『尖閣諸島・琉球・中国—日中国際関係史』三和書房, 2002。②浦野起央・劉魁朝・植榮邊吉『釣魚台群島(尖閣諸島)問題・研究・資料匯編』勵志出版社、刀水書房, 2001。③季刊沖縄56, 1971。④季刊沖縄63, 1972。
- マックス・ウェーバーの主張した「社会的行為の意味的解明」は、人間の行為の動機を理解することによって、様々な社会の因果関係を証明する方法であり、地理的状况を解釈するうえで、きわめて有効であると考えている。この視点からアプローチしたものに下記の拙稿がある。平岡昭利「南鳥島の領有と経営—アホウドリから鳥糞、リン鉱採取へ—歴史地理学45-4, 2003, 1-14頁。



第1図 尖閣諸島の位置

Figure 1. Location of the Senkaku Islands

拓した古賀辰四郎については、望月⁵⁾や片岡⁶⁾などが取り上げている。しかし、その多くが藍綬褒章を受章したときに古賀が提出した履歴書に依存し、その受章をもてはやした新聞記事を根拠にしているため、古賀の行動については事実と異なる点も多い。本稿は、尖閣諸島への日本人の進出を、明治期に見られた日本人の日本周辺島嶼への広範囲にわたる空間的な運動の一事例として捉え、行為論的な視点から検証しようとするものである。

II 尖閣諸島の調査と日本人の進出

明治政府は、1879 (明治12) 年に琉球藩を廃止し沖縄県を設置したが、その県域は広大で多くの無人島を抱え領土確定の必要があった。とくに清国と琉球の間に散在する無人島 (尖閣諸島) の問題があり、1884 (明治17) 年、内務省は沖縄県に調査を命じている (第1表)。沖縄県の石浜兵吾は調査に先立ち、清国からの帰路に無人島を視察していた美里間切の山城永保に聴

取を行い、久米赤島 (赤尾嶼)、久場島 (黄尾嶼)、魚釣島の状況と、これらの島々が英国海図や『中山伝言録』に記載の島々にあたることを沖縄県に報告している。

1885 (明治18) 年10月、沖縄県が日本郵船から借り上げた出雲丸 (720トン) によって無人島 (尖閣諸島) の調査が行われた。帰港後、出雲丸の船長から沖縄県に提出された「魚釣、久場、久米赤島回航報告書」⁸⁾には、

…特ニ海島ノ群集スルハ各礁島極メテ夥シク
魚釣島ノ如キノ清流ニ富ムモ其ノ地味恐ク
ハ人住ニ適スルモノニ非ラス 要スルニ右諸
島ハ天ノ海島ニ其ノ住所ヲ賦与シタルモノト
謂フモ可ナリ…

と、これらの島々は人の住むところではなく、島の棲む場所と述べている。

同じく視察した石浜兵吾は、県令に「魚釣島外二嶋巡視取調概略」⁹⁾として報告し、この中で魚釣島については

…本船ノ前面数海里ノ場ニ於テ屹焉トシテ聳

5) 望月雅彦「古賀辰四郎と大阪古賀商店」南島史学35, 1990, 1-21頁。

6) 片岡千賀之「古賀辰四郎一八重山の水産開発と尖閣列島の開拓一」西日本漁業経済論集29, 1989, 69-82頁。

7) 外務省外交史料館所蔵「帝国版図関係雑件」。

8) 前掲7)。

9) 前掲7)。

第1表 尖閣諸島関係年表

Table 1. A chronological table of Japanese people's activities in the Senkaku Islands

	政府・沖縄県関係	民 間	
		古賀辰四郎関係	その他
1879年（明治12）	沖縄県設置（琉球処分）	（古賀商店・那覇本店を開く…23歳）	
1882年（明治15）		（古賀商店・石垣支店を開く）	
1884年（明治17）	内務省が沖縄県に調査を要請	（尖閣諸島探検…履歴書より）	
1885年（明治18）	香港の新聞『申報』が日本人の尖閣諸島への進出を警告	（尖閣諸島探検…官有地拝借願より）	
	沖縄県が尖閣諸島を調査し県所轄を要望		
	政府は「国標」不要を回答		
1887年（明治20）	軍艦「金剛」が八重山、尖閣諸島を調査		
1890年（明治23）	沖縄県知事が水産取締の必要から再度、県所轄を要望		
1891年（明治24）		大東島開拓へ 上陸できずに断念	伊澤矢喜太が魚釣島に進出
1892年（明治25）	軍艦「海門」が沖縄周辺島嶼を調査		
1893年（明治26）	県知事が標杭建設を上申（3回目）		久場島（魚釣島）置き去り事件
1894年（明治27）	日清戦争が勃発		
1895年（明治28）	政府が沖縄県の標杭建設を認める	第4回内国博覧会へ海産物出品	
	日清戦争終結	久場島拝借願を提出	
1896年（明治29）	政府が尖閣4島を古賀に無償貸与	伊澤を案内人として雇用	
1897年（明治30）		尖閣諸島探検	
1899年（明治32）		県知事に随行し、香港などを視察	
1900年（明治33）		古賀の依頼によって宮島・黒岩が尖閣諸島の学術調査を行う	
1903年（明治36）		セントルイス万博へ水産物を出品	
1910年（明治43）		藍綬褒章を受ける	
1918年（大正7）		古賀辰四郎死去	
1926年（大正15）	尖閣諸島の古賀の無償貸与期間が終了	古賀善次が尖閣諸島の借地料を支払う	
1932年（昭和7）	政府が尖閣諸島を払下げる	古賀善次が有償で尖閣諸島の払下げを受ける	

（ ）は古賀辰四郎自身による記述である。

タルモノアリ是即チ魚釣島ナリ 同八時端艇
 ニ乗シ其西岸ニ上陸シテ周囲及内部ヲ踏査セ
 ント欲スレトモ頗ル峻阪ナルヲ以テ容易ニ登
 ル事能ハス 沿岸ハ又巨巖大石縦横ニアリ…
 (略) …此嶋嶼ノ周囲ハ恐ク三里ヲ超エサル
 ヘシ… (略) …沖縄本嶋ト同種ノ雑草木ヲ以
 テ蔽シ間々溪間ヨリ清水流ルレトモ其量多カ
 ラス 平原ナキヲ以テ耕地ニ乏シ浜海水族ニ

富ムヲ認ムレトモ前頭ノ地勢ナルカ故ニ目下
 農漁ノ事業ヲ営ムニ便ナラス… (略) …島地
 素ヨリ人蹟無シ…
 と記述している。さらに石沢は、
 …海禽ノ最モ多キハ信天翁¹⁰⁾トス 此鳥魚釣
 島ノ西南浜少ク白沙ヲ吹寄セタル溪間ニ至ル
 ノ間地色ヲ見サル迄ニ群集ス 実ニ数万ヲ以
 テ弄スヘク… (傍点筆者)

10) アホウドリのことであり、バカ鳥、トウクロウ、沖ノ大夫などとも呼ばれた。

と島が無人島であり、島に生息するアホウドリが驚くほど多いと報告している。また、アホウドリが「素ヨリ無人嶋ニ棲息セルヲ以テ曾テ人ヲ恐レス 小官等共ニ語テ曰ク人ヲ恐レサレハ宜ク生擒トナスヘシ」とし、人を恐れないため「暫時、数十羽数百卵ヲ得タリ」、さらに「此島海禽中最モ大ナルモノニシテ量大凡拾斤ニ内外ス 嗅気アレトモ肉ハ食料ニ適ス」と、その利用などにも言及している。アホウドリの大群が調査者の石沢にインパクトを与えたのか、報告書の多くがアホウドリについての記述に割かれている。魚釣島以外の島の調査は、天候悪化と日没のため上陸を断念し船上からの観察だけで那覇に帰港した。

出雲丸の帰港後、石沢などの報告を受けた沖縄県令の西村捨三は、1885年11月5日付けで直ちに内務卿の山縣有朋に「魚釣島外二島実地取調ノ義ニ付上申¹¹⁾」し、至急「本縣所轄ノ標札」を建設すべきとした。だが、「近時 清国新聞紙等ニモ我政府ニ於テ台湾近傍清国所属ノ島嶼ヲ占拠セシ等ノ風説ヲ掲載¹²⁾」したこともあり、岩だらけの無人島をめぐる清国との摩擦を避けたい明治政府は、既に外務卿井上馨と内務卿山縣有朋の間で「沖縄県ト清国トノ間ニ散在スル無人島ニ国標建設ハ延期スル方 然ルヘキ旨回答¹³⁾ノ件」(1885年10月21日)を決定していた。

しかし、明治20年代に入ると資源を求めて日本人の尖閣諸島への進出が続き、放置できないと考えた沖縄県は1890(明治23)年、再度、内務大臣に宛てて

…右ハ無人島ナルヨリ是迄別ニ所轄ヲモ不相定 其儘ニ致置候処 昨今ニ至リ水産取締ノ必要ヨリ所轄ヲ被相定度旨 八重山島役所ヨ

リ伺出候次第モ有之旁此際管下八重山島役所々轄ニ相定度此段相伺候也¹⁴⁾

と伺書を提出したものの政府からの回答はなかった。

その後、1891年に熊本県の伊澤矢喜太が、沖縄の漁民を雇用して尖閣諸島に上陸し海産物やアホウドリ¹⁵⁾を採取している。また、1893年には、久場島でアホウドリの羽毛採取を行っていた労働者を置き去りにした事件が発生しており、那覇に滞在していた笹森儀助は、「余、直チニ役所長ニ面会シ、遭難者四人ニ面スルヲ得タリ¹⁶⁾」として事件を次のように記述している。

該嶋ハ八重山ヨリ六十里位亥子ニ当リ、旧正月十四日、石垣嶋出帆。全十六日、該嶋ニ着シ、爾来「バカ」鳥ノ綿毛ヲ採ル業ニ従事シ、後チ綿毛数拾俵ニ充チタレハ、雇主ハ之ヲ積テ飯米ヲ持チ再ヒ来ラントノ約ニテ、僕等四名ヲ残シ、食尽クルモ猶帰リ来ラス、餓死ヲ分トセリ。偶、沖縄糸満村ヨリ夜光貝漁ノ為メ七人渡航セリ。勸助等四人共ニ之レニ依頼シ、着覇ノ上ハ船賃トシテ、金二百円渡スヘキノ約ニテ、旧五月八日丸木船二艘ヲ一処ニ結ビ、之レニ乗り七昼夜ニシテ、旧五月十二日纔カニ本港ニ着スルヲ得タリ。…(傍点筆者)

これらの遭難者を雇用していたのは、彼らが所有していた契約書から鹿児島商人であり、アホウドリの羽毛採取を目的に尖閣諸島に渡航していたことや、救助した糸満漁民はヤコウガイ(第2図)の採取を目的に進出していたことがわかる。

また、同年には熊本の野田正などが天草島の漁民十余名を連れて尖閣諸島へ行き、さらに

11) 前掲7)。

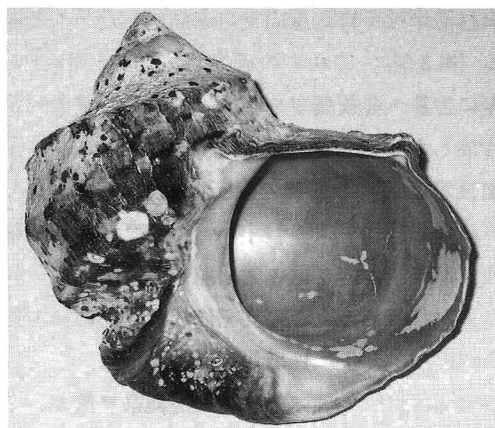
12) 「台湾警信」申報1885年9月6日付。

13) 前掲7)。

14) 前掲3) ④121頁。

15) 前掲2) ②651頁。

16) 笹森儀助(東喜望校注)『南嶋探検1』平凡社、1982、135-137頁。



第2図 ヤコウガイ 2003年12月著者撮影
Figure 2. Great green turban

1891年に渡航した伊澤も、再度この年、尖閣諸島へ行ったものの帰港時に台風と遭遇し中国の福建省まで流されている。¹⁷⁾

以上のように明治20年代中頃には、尖閣諸島へアホウドリやヤコウガイを求めて多くの日本人が進出していたのであり、これらの扱いに苦慮していた沖縄県は、1893（明治26）年11月に「本件 島嶼へ向ケ漁業等ヲ試ムル者アルニ付之カ取締ヲ要スルヲ以テ同県ノ所轄ト成シ標杭建設シタ旨…」¹⁸⁾という3回目の願書を内務大臣および外務大臣に上申したのであった。

翌1894年8月、日清戦争が勃発、日本軍が旅順を占領し大勢が決した12月になって、内務大臣野村靖は

久場島魚釣島へ所轄標杭建設ノ義別番甲号之通り沖縄県知事ヨリ上申候処本件ニ関シテ別番乙号ノ通り明治十八年中貴省ト御協議ノ末指令及ヒタル次第モ有之候得共其当時ト今日トハ事情モ相異候ニ付別紙閣議提出ノ見込ニ有之候条一応及御協議候也¹⁹⁾

と外務大臣に報告し、魚釣島の標杭建設を閣議に提出した。これを受け翌1895年1月に

内務大臣請議沖縄県下八重山群島ノ北西二位スル久場島魚釣島ト称スル無人島へ向ケ近來漁業等ヲ試ムルモノ有之為メ取締ヲ要スルニ付テハ同島ノ儀ハ沖縄県ノ所屬ト認ムルヲ以テ標杭建設ノ儀同県知事上申ノ通許可スヘシトノ件ハ別ニ差支モ無之ニ付請議ノ通ニテ然ルヘシ²⁰⁾

との閣議決定がなされ、政府は沖縄県に標杭の建設を指令した。同年4月、下関において「日清講和条約」が締結され日清戦争は終結した。

この年の6月、古賀辰四郎が久場島の「官有地拝借御願」²¹⁾を提出している。

III 古賀辰四郎の尖閣諸島への進出過程

古賀辰四郎の尖閣諸島への進出は、1909（明治42）年に、その殖産事業などにより藍綬褒章を下賜されたことから、とりわけその意義が強調されてきた。さらに1970年以降は領土問題が絡み、古賀を讃える顕彰碑が魚釣島と石垣市に建立された。マスコミも古賀を取り上げ、研究論文でも彼について言及しているものもある。だが、それらは、褒章受章時に古賀自身が沖縄県へ提出し、賞勲局に内申された履歴書に依存して古賀の行動を捉えており、信憑性には限界があるといえる。例えば、望月論文は褒章受章時に提出された履歴書を中心に分析したものであるが、その内容が矛盾だらけであることに気づいていない。以下、これらの点を吟味しながら古賀の行動と尖閣諸島への進出を検討する。²²⁾

（1）顕彰碑の碑文と尖閣諸島探検の信憑性
古賀辰四郎の顕彰碑は、1978（昭和53）年に魚

17) 前掲2) ②651頁。

18) 前掲7)。

19) 前掲7)。

20) 前掲7)。

21) 前掲3) ④136-137頁。

22) 前掲5)。



第3図 石垣市八島町緑地公園の「碑文」
2003年12月著者撮影

Figure 3. The inscription of Tatsushiro Koga in
Ryokuchi Park, Ishigaki City

釣島に建てられた「古賀辰四郎翁顕彰碑」と、それから20年後の1998（平成10）年に石垣市八島町の緑地公園に建立された「碑文」（第3図）の2つがある。ともに碑文の前半には、古賀の沖縄県への来歴が記されているが、魚釣島の碑では「翁ハ安政三年一月十八日福岡県ニ生マル資質温良 ツトニ海事思想ニ富ム 明治十二年沖縄県ニ移住 那覇ニ本店ヲ置キ 爾来 殖産ノ事業ヲ興シ…」とあり、石垣市の碑では「古賀辰四郎は福岡県の人 廃藩置県の明治十二年来県 同年那覇で古賀商店を 十五年石垣島大

川村海岸近くに八重山支店を開設した…」とある（第3図）。これらの碑文は、1909（明治42）年に古賀へ藍綬褒章を下賜するために賞勲局が作成した文書を基にしたものであり、「日本帝國褒章之記」の古賀の個所には、「資質温良夙ニ海事思想ニ富ミ」「明治十二年福岡県ヨリ移住シ那覇ニ本店ヲ置キ爾来殖産ノ業ニ従ヒ…」と書かれてある。この文を作成するために古賀辰四郎が県知事に提出した履歴書には、

一明治拾貳年琉球藩ヲ廢シ沖縄県ヲ置カレタル時來県シ 専ラ海産物ノ採取ニ従事シタリ
一同年五月本店ヲ那覇ニ置キタル 一明治拾三年二月八重山石垣島ニ海産物其他視察ノ為出張シ明治拾五年二月支店ヲ開設シタリ

とあり、これが原本と言え引用され広まっていたのである。

これに先立って1895（明治28）年6月に内務大臣に宛てて提出された久場島（第1図）の「官有地拝借御願」では、

…大洋中ニ国ヲ為ス国柄ナルニモ係ラス水産業挙ラサルハ予テ憂ヒ居候 次第ナレハ自ラ帆船ノ勞ヲ取り明治十二年以降十五年ニ至ルマテ 或ハ琉球ニ或ハ朝鮮ニ航シ専ラ海産物ノ探検ヲ致候…

と述べられているものの、古賀商店の那覇本店や八重山支店の開設などは一切書かれていない。

古賀の履歴書によると、本店や支店の開設については、現在の福岡県八女市山内の茶農家の三男であった古賀辰四郎が、1879（明治12）年、23才の時に沖縄に渡りその時に那覇本店を、3年後の1882年に八重山支店を開設したというこ

23) 恵忠久『尖閣諸島 魚釣島 写真・資料集』, 1996, 39頁。

24) 国立公文書館所蔵「公文雑纂 明治42年 内閣4巻」。

25) 前掲24)。

26) 前掲3) ④136頁。

27) 古賀辰四郎は、1856年1月18日福岡県上妻郡山内村で古賀門次郎の三男として生まれた。2人の兄は早くから大阪に出て、古賀商店（大阪）を営んでいる（八女市山内での聴取による）。

28) ①八重山歴史編集委員会編『八重山歴史』, 1954, 393頁。②新里金福・大城立裕編『沖縄の百年 第1巻—人物編』琉球新報, 1969, 261-264頁。③那覇市史編集委員会『那覇市史 通史集第2巻 近代史』, 1974, 177頁。④西里喜行『近代沖縄の寄留商人』ひるぎ社, 1982, 121-131頁など。

とである。しかしながら、1909（明治42）年、古賀に藍綬褒章が下賜された同じ年に刊行の『石垣島案内』には、「古賀支店 海産物商トシテ明治二九年五月開業 全三十年尖閣列島開拓ニ從事シ…」と書かれ、『先島朝日新聞』も1896（明治29）年に八重山支店が開業したと報じており、古賀の履歴書とは矛盾している。

また、古賀辰四郎による1884（明治17）年または1885年の尖閣諸島の探検について、1895年に古賀が提出した「官有地拝借御願」では、「明治十八年沖繩諸島ニ巡航シ 舟ハ八重山島ノ北方 九拾海里ノ久場島ニ寄せ 上陸致候処 図ラスモ俗ニバカ島ト名ノル島ノ群衆セルヲ発見致候…（傍点筆者）」と久場島に上陸したように書かれている。しかし、この年に沖繩諸島を巡航し、「バカ島」の大群を発見したのは、前述した明治政府の指令で沖繩県が日本郵船から借り上げた出雲丸による調査を実施したときである（第Ⅱ章参照）。引用文の中で久場島と書かれてあるのは魚釣島のことで、この時期、久場島と魚釣島の呼称が逆になっていたことによる³²⁾う。

この探検について、1909（明治42）年の藍綬褒章受章時の古賀の履歴書には「明治拾七年尖閣列島ニ人ヲ派遣シ海産物採取ヲナサシメタリ（傍点筆者）」と書かれてある。「官有地拝借御願」では1885（明治18）年とされていた探検が、この文書では1884年と1年早くなり、尖閣

諸島に「上陸致候」と書かれていたのが、1909年提出の履歴書では「人ヲ派遣シ」となっている。1885年の沖繩県の出雲丸による調査の前年に県は尖閣諸島に関する情報を収集しているが、古賀に関しては記録もない。仮に古賀の探検が1884年として、その後、人を派遣し続けたとすれば、1885年に実施した沖繩県の調査後に提出された報告書の「島地素ヨリ人蹟無シ」と矛盾する。

さらに決定的なのは、この1884（明治17）年に実施した古賀の探検には、大阪商船の永康丸³⁵⁾が使用されたというが、この時には永康丸は存在すらしないのである。永康丸は、1896（明治29）年11月に建造された390トンの貨客船で1905年に朝鮮沖で沈没している。加えて、永康丸だけでなく、大阪商船という会社もこの探検時には存在していないのである。大阪商船は、中小海運会社が連合して1884年5月に誕生した会社で、探検が行われたという同年3月には存在していない。

また、古賀は1884年に尖閣諸島へ人を派遣して以来、年々、労働者を派遣してきたと述べているが、1884年からアホウドリを捕獲し続けられ、3～4年後にはアホウドリは減少しているはずである³⁸⁾。そのうえ、奇妙なのは1891（明治24）年に尖閣諸島に渡航し、アホウドリを捕獲した経験のある前述の伊澤矢喜太を、古賀は1896年に案内人的な業務で雇用するのである³⁹⁾。

29) 岩崎卓爾『石垣島案内』、1909、11-12頁。

30) 先島朝日新聞1930年1月8日付。

31) 前掲3) ④136頁。

32) 前掲2) ③478頁。魚釣島は和平山あるいはヨコンと、黄尾島は久場島と呼ばれていたものが、この時期、魚釣島が久場島に、黄尾島がヨコンと逆転して呼称された。

33) 前掲3) ④139頁。

34) 前掲7)。

35) 前掲3) ①131頁や年表など。前掲27) ④124-125頁。

36) 神田外茂夫編『大阪商船株式会社五十年史』大阪商船株式会社、1934、391・402頁。

37) 前掲36) 37頁。

38) 平岡昭利「鳥島開拓と借地継続の経緯について—八丈島と大東島を結ぶ島の一考察—」（関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相』大明堂、1998）、343-362頁の鳥島や前掲4)の南鳥島の事例から、アホウドリの捕獲開始後、数年でその数は大幅に減少している。

39) 前掲2) ②651頁。

伊澤より7年も前から尖閣諸島へ進出し、その後も継続的にそこで事業を行っていたとする古賀が、案内人の名目でどうして伊澤を雇用する必要があるのだろうか。

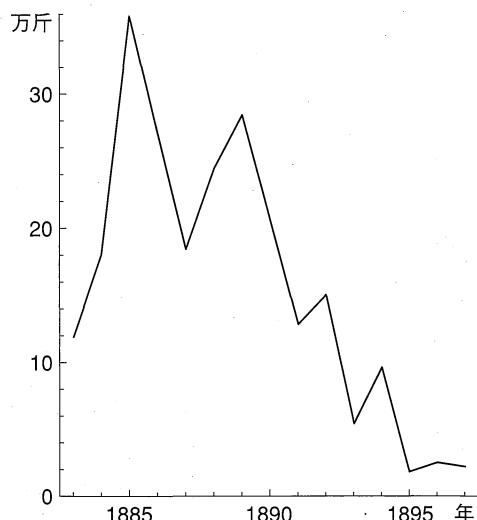
このように、古賀の提出した「官有地拝借御願」や藍綬褒章受章時に提出した「履歴書」などは矛盾だらけである。とくに古賀の履歴の過去の早い段階での記述については、信用できるものではなく、十分な史料批判が必要である。

(2) ヤコウガイの採取と古賀辰四郎 古賀辰四郎は、この履歴書の中で、沖縄の貝生産について

…是等天然物ヲ利用スルノ念殆ンドナク僅ニ自給自足ヲ以テ満足セルノ状況ニ在リシガ故ニ海中ノ産物ヲ採取スルモノナキノミナラス彼ノ工業用トシテ高価ノ販路ヲ有スル貝類則チ夜光貝、高瀬貝、広瀬貝等ノ如キ莫大ノ貝類ハ唯其肉ヲ食シタルノミニシテ之ヲ放棄シ 聊カモ愛惜スル所ナキノ有様ナリ…⁴⁰⁾

と記述している。古賀は、捨てられていた貝殻を購入し神戸の外国商人に売却、取り引きを行うとともに島民に漁業を奨励し、沖縄の殖産に貢献したと述べている。また、古賀とヤコウガイ(第2図)の関わりについて論及した望月は、古賀の記述をそのまま取り入れ、さらに『大日本外国貿易年表』にみられる1883(明治16)年からのヤコウガイの輸出については、ほぼ古賀が独占していたとした。⁴¹⁾

だが、古賀のいう沖縄の採貝業は「肉ヲ食シタルノミニシテ之ヲ放棄シ」ということはなく、古賀がヤコウガイの輸出(第4図)を開始しそれを独占していたこともない。というのも沖縄の採貝業、とくにヤコウガイの海外輸出は長い



第4図 ヤコウガイ(貝殻)の輸出量の変化
Figure 4. Changes in the amount of export of the great green turban

資料:『大日本外国貿易年表』より作成。

歴史があり、琉球王国時代よりヤコウガイは中国へ螺鈿(らでん)細工の原料として輸出されていた。また、琉球においても螺鈿は最も重要な工芸で17世紀には職制として確立され、琉球王府には、その指導や奨励を行う「貝摺奉行」⁴²⁾が置かれていたほどである。

明治に入って、ヤコウガイの生産は清との貿易が一時的に途絶えたり、琉球を支配していた薩摩藩への移出の減少により低迷したものの、それでも1875(明治8)年、那覇港から移出されたヤコウガイは18.4トン(生産額1,047円84銭)もあった。⁴³⁾翌76年には、内務省から琉球藩に赴任した河原田盛美が、ヤコウガイ数百個をアメリカのフィラデルフィアで開催された万国博覧会へ出品し好評だったことから、同年、横浜の商人にヤコウガイ4俵を見本として送付した。⁴⁴⁾このことによって、輸出先は中国だけではな

40) 前掲3) ④141頁。

41) 前掲5) 3頁。

42) ①白井祥平『ものと人間の文化史 貝Ⅱ』法政大学出版局、1997、592-593頁。②真栄平房昭「琉球王国における海産物貿易—サンゴ礁海域の資源と交易」(秋道智彌編『海人の世界』同文館、1998)、219-236頁。

43) 「一木書記官取調書」(『沖縄県史 第14巻 資料編4 雑纂1』琉球政府、1965) 217頁。

44) 河原田盛美「琉球青螺ノ説」大日本水産会報告43、1885、12-16頁。

くヨーロッパやアメリカに拡大することになり、1875年から1880年までに沖縄県より出荷されたヤコウガイの生産額は98,730円に達した。

ヤコウガイは「遂ニハ軒下雨落ニ數キシモノマテ集ムルニ至リ 又各島ヨリモ悉ク之ヲ出スニ至リタリ⁴⁵⁾」となり、価格も1875年にはヤコウガイ2～3個で1厘であったものが、1880年には1個が3～4銭に高騰し、採取地域も沖縄本島や周辺離島から先島まで拡大した⁴⁶⁾。加えて1884（明治17）年に糸満漁民によって水中眼鏡が考案され、ヤコウガイの採取ブームに拍車がかかった。1887（明治20）年頃の報告には「八重山近海ニ於テ最モ多クヤクガイヲ出ス処ハ石垣島ノ内安良ノ白保ニシテ大抵一隻ノ漁船ヲ以テ一年ノ採獲三千個ニ至ルト云フ⁴⁸⁾…」とあるように大量のヤコウガイが採取された。その結果、「近年愈ニ濫捕ノ弊ヲ生シ 漸次相減少シ且稚小ノ者外格外ノ大殻ヲ得ル事稀ナリ⁴⁹⁾」とヤコウガイは急速に減少した。

第4図は、ヤコウガイの海外への輸出量を示しているが、1889（明治22）年以降、急激な減少をみている。1894年の水産調査では先島においては「数年来の濫獲に因り、年一年減少して殆ど亡滅せんとすれども⁵⁰⁾…」とあるが、それでも1893年の八重山からの移出品の代金では、ヤコウガイが米や粟などの産物を押さえて第1位⁵¹⁾であった。

以上のようなヤコウガイの採取の展開と古賀辰四郎との関わりは、古賀自身が藍綬褒章受章

時の履歴書で述べているような早い時期からあったわけではない。というのも古賀は、明治後期からヤコウガイや真珠、べっ甲、海參^{いりこ}などを数多くの博覧会へ毎回のように出品し数々の賞を受けているが、最初の受賞は1895年の第4回内国勸業博覧会においてである。それ以前、例えば1890（明治23）年の第3回内国勸業博覧会では、沖縄県からの出品者は200名以上であったが、その中には古賀の名前すらみいだせない⁵³⁾のである。

寄留商人のほとんどが米や砂糖や雑穀などを扱うなかで、古賀は1887（明治20）年頃からヤコウガイなどの海産物の取り引きによって、沖縄の有力な商人の一人になっていったと考えられる⁵⁴⁾。

しかし、古賀辰四郎がヤコウガイの取り引きを本格化した時期は、ヤコウガイ生産のピークを過ぎており（第4図）、古賀はその活路を沖縄本島の東方、無人島である大東島の海洋資源に見いだそうとしたと考えられる。1891（明治24）年12月、古賀は大東島開拓の願書を沖縄県知事に提出し、これに対して県は「心得書」と11ヵ条にわたる「命令書」を古賀に下付した。

翌92年3月、古賀は県に保証金を納め、漁夫31名とともに汽船大有丸で大東島に向かった。

3月22日大東島に着いたが風波が荒く、加えて隆起サンゴ礁の断崖のため上陸ができず、やむなく停泊し「翌朝に至り、全島を一周し安全の地を選び、是非、上陸仕る筈の處 豈図らんや

45) 前掲44) 15頁。

46) ①「水産調査予察報告」（沖縄県農林水産行政史編集委員会『沖縄農林水産行政史17巻』農林統計協会、1990）559頁。

②仲松弥秀「糸満町及び糸満漁夫の地理学的研究」地理学評論20-2、1944、23頁。前掲28) ③390頁では糸満漁民の八重山進出は1882年としている。

47) 上田不二夫『沖縄の海人—糸満漁民の歴史と生活』沖縄タイムス社、1991、116頁。

48) 前掲46) ①559頁。

49) 前掲46) ①559頁。

50) 森房次郎「沖縄先島水産調査」大日本水産会報151、1895、67頁。

51) 前掲43) 592-593頁。

52) ナマコをゆでてから乾燥したもの。

53) 「第3回内国勸業博覧会出品目録 水産」（『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料144』明治文献資料刊行会、1974）。

54) 金城宏「寄留商人に関する一考察—その特質と存立基盤—」商経論集（沖縄国際大学）5-2、1977、45-70頁。

到る處同様にて到底上陸の目的無⁵⁵⁾」と上陸ができないまま那覇に帰港している。

(3) 尖閣諸島への進出—ヤコウガイからアホウドリへ 1892 (明治25) 年の大東島開拓に失敗した段階で、古賀辰四郎は尖閣諸島についての情報は入手していたものと思われる。というのも1891年には前述の伊澤矢喜太が尖閣諸島でアホウドリの羽毛を採取していたこと、糸満漁民がサバニを使用して尖閣諸島まで進出してお⁵⁶⁾り、古賀はその糸満漁民からヤコウガイを購入していたからである。この糸満漁民と古賀の関わりについて『沖縄漁業調査書(2)』(1913年頃調査)には「尖閣諸島ハ…(略)…明治25年頃糸満町ノ漁民基ガ之ニ漂流シ坂町ノ上 古賀辰四郎ニ計リタル結果 汽船ヲ派遣シテ遂ニ之ヲ確⁵⁷⁾実ニスルヲ得タリ」と述べられている。この時期(1892年)以降、古賀の行為目的は、減少を続けるヤコウガイから尖閣諸島のアホウドリへと向かうことになる。

1895 (明治28) 年6月、古賀辰四郎は、アホウドリを捕獲するため前述した久場島借用の「官有地拝借御願」を内務大臣に提出した。その文面はアホウドリの捕獲一辺倒であり

…予テバカ島ノ羽毛ハ欧米人ノ大ニ珍重スル
処ト承リ居候間 試ニ数羽ヲ射殺シ商品見本
トシテ其羽毛ヲ欧州諸国ニ輸送仕候処 頗ル⁵⁸⁾
好評ヲ得 其注文マデ有之候…

と述べている。ただ、この時期にアホウドリの羽毛が海外で高値で売れることは、玉置半右衛門が鳥島での事業で莫大な利益をあげていること⁵⁹⁾によって広く知られており、古賀は羽毛の価値を十分に認識していたと考える。

また、久場島の借用にあたっては

…久場島バカ島ノ数量多キハ即チ多キモ無限
ノモノニ無御座候故捕獲ノ自由ヲ各人ニ与ヘ
ラレ候得ハ必ス右捕獲ニ競争起リ甲乙ノ得ル
処両々共ニ少量タル可ク到底之ヲ貿易品トシ
テ海外ニ輸出スル能ハサル様相成可申候…
(略)…捕獲ノ競争場ニハ保護ノ念ハ聊カモ
見ラレサルモノニ候…⁶⁰⁾

と借地権の獲得競争や権利の分散を恐れ、アホウドリ捕獲の独占を目論んでいたとみられる。

翌1896 (明治29) 年9月、政府は古賀に申請の久場島だけでなく、尖閣4島を30年間無償で貸し与えた。古賀は外洋航海に耐えうる漁船2隻を建造し、1897年3月に八重山から出稼者35名と食料を載せ、尖閣諸島へ出航させた。これが尖閣諸島への最初の航海と考えられ、船は20日余りの滞在後に採取した物資を積んで帰港した。続いて同年4月にも尖閣諸島へと出航しており、この1897年の尖閣諸島での採取物資は、アホウドリの羽毛17,000斤(生産額6,800円)とヤコウガイなどの海産物(生産額7,500円)で、合計14,300円であつた⁶¹⁾(第5図)。翌98年には、大阪商船の須磨丸(1,560トン)を借り上げ、

…自ラ移民五十余名ヲ引索シ 糧食日用器具
各種ノ材料等ヲ備エテ首途ニ就ケリ 本人ガ
此ノ渡航ハ同島ニ移民計画ノ基礎ヲ確立セン
トノ希望ナリシカ故ニ暫時島内ニ停留スルコ
ト、セリ…⁶²⁾

とこれまた古賀自身が尖閣諸島へ行き現地で開拓を指導したように述べられているが、実際は行ってもいない。須磨丸で尖閣諸島へ行ったのは、古賀の親戚とされる尾滝延次郎であり、

55) 江崎龍雄編『大東島誌』, 1929, 14頁。

56) 前掲43) 606頁。

57) 『沖縄漁業調査書(2)—宮古郡・八重山郡漁業調査書』ハワイ大学ハミルトン図書館所蔵(複製 沖縄県立図書館所蔵)。

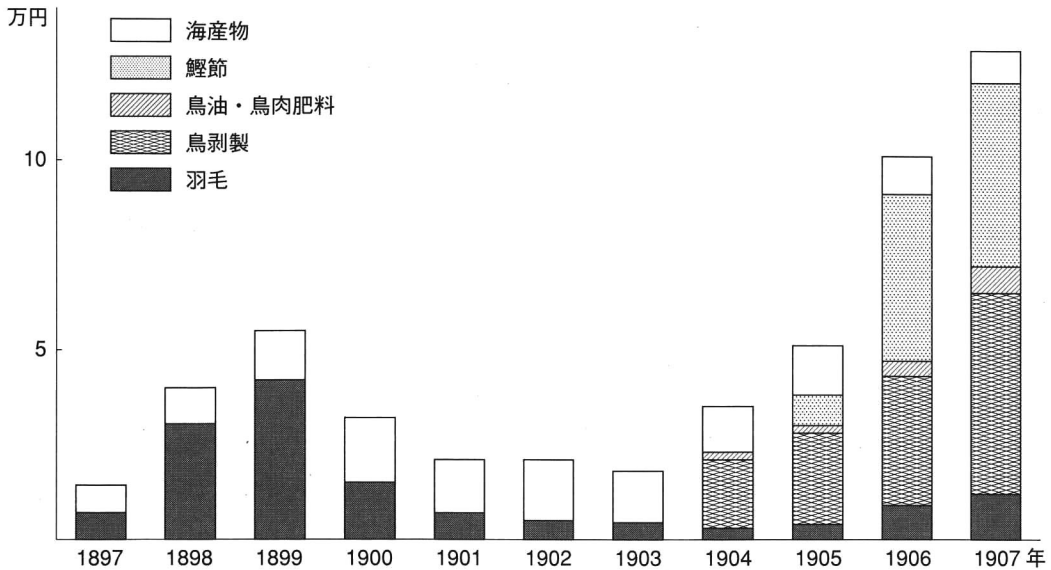
58) 前掲3) ④136頁。

59) 前掲38) 350頁。

60) 前掲3) ④137頁。

61) 前掲3) ④150頁。

62) 前掲3) ④145頁。



第5図 尖閣諸島における生産額の推移

Figure 5. Changes in products in the Senkaku Islands

資料：『季刊 沖縄』63号、150-151頁より作成。

「移民五十余名ヲ引索シ」ではなく出稼労働者28名が乗っていた⁶³⁾。この年の生産は、出稼労働者の増加もあって大きく伸び、アホウドリの羽毛が65,000斤（生産額30,550円）と増加し、海産物の生産額9,600円を合わせると40,150円となった⁶⁴⁾（第5図）。古賀は莫大な利益を上げたのである。

IV 尖閣諸島の産業の変遷と集落

（1）アホウドリの激減と学術調査 古賀辰四郎が尖閣諸島に進出して3年目の1899（明治32）年には、アホウドリの羽毛採取が進展し、その生産は85,000斤（生産額42,500円）と増加した。海産物を合わせた生産額は、55,500円にのぼり、古賀は巨額の富を入手したのである。だが、順風満帆に見えた事業も次第に陰りを見せ始めた⁶⁵⁾。2人の出稼人が脚気により死亡し、さ

らに4年目の1900年にはアホウドリの数が激減、羽毛の生産は前年の3分の1まで減少した。古賀の事業の基礎が崩れかけたのである。

驚いた古賀は、突然、上京し東京大学に出向き理学博士の箕作佳吉に面会した。その際、尖閣諸島で「無数の鳥類棲息するを以て数年前以来 之に渡航して諸島の捕獲に従事せり 然るに近年其鳥数大いに減じ 営業に困難を感じる次第となりたり 之に付て何か好工夫あれば高教を仰ぎたし…」と助言を求めた。これに対し⁶⁶⁾箕作は実地調査が必要ということを告げ、同教室の理学士宮島幹之助の派遣を推挙し、尖閣諸島の学術調査が行われることになった。調査には宮島の他、沖縄博物学の学究である沖縄師範学校の黒岩恒も加わり、古賀辰四郎や八重山島司の野村道安も同行した。調査船は1900（明治33）年5月3日に那覇港を出港し、石垣港に

63) 前掲2) ②652頁。

64) 前掲3) ④150頁。

65) 琉球新報1899年9月7日付。

66) 前掲2) ①585頁。

寄り西表島で石炭を積み込み、途中、「疑島」であるイマキ島の有無を確認し5月10日に尖閣諸島に到着した。調査後5月20日に那覇に帰港している。

この学術調査で明らかになった島々の状況は、次のようなものであった。魚釣島には人が居住せず、冬季のアホウドリの捕獲のために建てられた小屋のみが点在していた。魚釣島には湧水があることから、開拓当初には労働者を送ったと考えられるが、船着場もなく居住条件も悪い⁶⁷⁾ためか、開拓の主体は久場島に移ったものといえよう。魚釣島の南東、南小島と北小島には鳥類も多く、アホウドリなどの捕獲が行われていた。久場島は「古賀氏が営業の主眼とする信天翁の本拠なれば…」⁶⁷⁾出稼労働者が10月から翌年の3月までアホウドリなどの捕獲に従事し、居住用の小屋が建設され古賀村が形成されていた。

アホウドリの捕獲の方法は、鳥島などで行われていたのと同様、撲殺であり出稼労働者1人で1日に300羽を捕獲した。1897(明治30)年から1900年までの3年間に20万斤の羽毛が採取された。アホウドリ4羽で1斤の羽毛が採れるとすれば、およそ80万羽のアホウドリが殺されたことになり「島上一面 鳥の死骸を以て満され居る」⁶⁸⁾という状況であった。羽毛の腹毛は100斤で30~40円、皮膚に密生する柔らかい綿毛では80~90円にもなったという。

だが、アホウドリは「三十二年より本年春に至る鳥の最も多き期節にも鳥数は大いに少なく」⁶⁹⁾と激減し、採取した羽毛の中には斑毛や黒毛が混ざる状況となり、幼鳥(黒毛)までも捕

獲していた。宮島は「もし従来の如く、労働者のなすまゝになし置かば、数年も経たぬ中に信天翁は全く此島に其跡を絶つに至る可し(傍点筆者)」⁷⁰⁾と注意をうながし、産卵に関係しない鳥のみを捕獲することなどの制限を求めたが、「該島の労働者果して此禁を守り居なや否や懸念の至なり」⁷¹⁾と述べている。数十万羽というアホウドリが群棲していた魚釣島では、1908(明治41)年には、その群棲箇所は島の北東の海岸のわずか2~3カ所に減少し、同じく全島がアホウドリで覆われていた久場島もわずかに4カ所となった⁷²⁾。宮島の懸念していた通り、アホウドリは激減した。

(2)アホウドリから剥製業・鰹漁業へ アホウドリが減少するなかで、1903(明治36)年、古賀はアホウドリ採取から鳥類剥製業への転進を図った。当時、ヨーロッパでは、美しい鳥の羽根や羽毛は婦人用装飾品に利用され高値で売買された。とりわけフランスにおいては、1次的に加工された鳥(剥製品・半製品)⁷³⁾は、主要な工業用原料の1つであった⁷⁴⁾。ただ、鳥の剥製業は技術をもつ専門職人が必要であり、古賀は職人を探すために上京した。1904年、横浜で南洋から帰国した16人の職人を見つけ出し、雇用契約を結び尖閣諸島での剥製業に従事させた⁷⁵⁾。

尖閣諸島のうち剥製業の中心は、アジサシ、カツオドリ、アカオネツタイチョウなどが群棲する南小島・北小島で、2島のうち平地が多い南小島に住居、作業小屋、貯水池がつくられた。鳥の捕獲には、長い竹さおの先に袋をつけた昆虫採集の網のようなものを使用した。捕獲され

67) 前掲2) ①587頁。

68) 琉球新報1900年7月13日付。

69) 前掲2) ②85頁。

70) 前掲2) ①594頁。

71) 前掲2) ①594頁。

72) 恒藤規隆『南日本の富源』博文館、1910、207-225頁。

73) 南鳥島でもアホウドリの羽毛採取から鳥類の剥製業へと移行した。前掲4) 8-9頁。

74) フランスで1891年上半期に輸入された工業用原料のうち「節鳥毛」は、羊毛、木綿、石炭、生糸などに続いて9番目の輸入額であった(官報2492、1891)。

75) 南鳥島で鳥類の剥製業に従事し、横浜に帰港した出稼者と考えられる。

た鳥の加工は、労働者4人が1組となつてまず鳥の頭を切断し、皮をはぎ鳥の肉を抜く作業を行った。その後、紙片を詰めて乾燥のうえ箱詰めされた剥製品は、神戸や横浜の外国商人に売られた。⁷⁶⁾残った鳥肉は、絞って油をとり骨なども肥料とした。1904（明治37）年から始めた剥製業は、同年、鳥類13万羽（生産額18,200円）、翌1905年には16万羽（生産額24,000円）と増加し、1907年には42万羽となり、鳥油や鳥糞（グアノ）などの肥料を含めるとその生産額は65,393円にのぼった。

さらにアホウドリの激減にともなう鰹漁業への進出は、1905（明治38）年のことである。古賀は鰹漁船を購入し、宮崎県から熟練した漁夫と鰹節製造業者を雇用し魚釣島で操業を開始した。同年の鰹節生産は13,000斤（生産額7,800円）であったが、翌1906年には生産高68,000斤（生産額44,200円）と急増し、県下有数の鰹漁業基地となった。⁷⁷⁾生産の増加とともに魚釣島には船着場が整備され、大釜が並ぶ納屋、倉庫、住居などが建設された。1910年頃には鰹漁業の従事者が52人居住し、うち7人が鰹節製造業者で残りが漁夫であった。漁夫の大部分は与那国島出身であり、沖縄本島の糸満や国頭からの出稼者もいた。収益は総収入より諸経費を控除したものを船主（古賀）6、漁夫4の比率で分配した。⁷⁸⁾古賀の利益は鰹漁業だけでも莫大なものになった。古賀はこの他、鳥糞（グアノ）の採取、樟腦の栽培や鳥もちの採取など、さまざまな事業を手がけている。

（3）古賀村の形成と崩壊 アホウドリから始まった古賀の尖閣諸島での事業は様々な分野に拡大し、魚釣島では鰹漁業と海産物、久場島で

は鳥糞の採取と農業、南小島・北小島では鳥類の剥製業と多角化が進んだ。事業の拡大に伴い出稼の募集も容易になり、期間も2～3ヵ月前後の出稼から長期間となり、人数も1交代20～30人から100人を超えるようになった。住居も1900年頃のアホウドリ捕獲のための仮小屋から、剥製業や鰹漁業が盛んになった1905年頃には、いくつかの恒常的な住居も建設され集落が形成され始めた。1908年には尖閣諸島で「開墾面積が六十町歩に達し、移住民の数二百四拾余名、戸数は九十九戸の多きあり…」⁷⁹⁾と報じられている。船便も1897年の年2回から1907年には年11回と増加した。魚釣島の北岸には、サンゴ礁をダイナマイトで爆破して船着場が整備されるとともに、海岸に高い石垣の防波壁が建設され、古賀村と呼ばれる村落が形成された（第6図）。

だが、古賀の事業は、藍綬褒章を下賜された1909（明治42）年頃がピークであり、その後、急速に衰退した。久場島での鳥糞（グアノ）採取は2年ほどで止め、大正に入ってから台湾肥料株式会社が鳥糞を採取したこともあったが、これも肥料価格の低迷で撤退した。南小島・北小島の鳥類の剥製業は、1910年頃に止めたものと思われるが理由ははっきりしない。魚釣島の鰹漁業も、大正後期には価格の低迷や県外漁船の進出によって衰退した。古賀の事業は、アホウドリをはじめとして略奪的生産が多く、そのため資源の枯渇は早く、長く続く産業はなかった。加えて、台風や冬季の強い季節風など居住条件は劣悪であった。

尖閣諸島での事業が最盛期を迎えていた1906年、古賀は西表島の西方の無人島、^{なかのおがんしま}仲御神島で鳥類の捕獲を開始した。1909年には、鳥類の剥

76) 琉球新報1908年6月27日付。

77) 琉球新報1910年11月23日付。

78) 前掲57)。

79) 琉球新報1908年6月19日付。

80) 正木任「尖閣群島を探る」採集と飼育3-4, 1941, 111頁。

の探検は、彼自身が履歴書の中で述べたものであり、事実とは考えられないことを指摘した。また、古賀のヤコウガイなどの取り引きは1887年頃からであり、彼の行為目的はヤコウガイが激減したことからアホウドリへと移り、貝の売買による資本蓄積により1897（明治30）年に尖閣諸島へ進出したものと考ええる。

だが、尖閣諸島への進出から、わずか3年で目的であったアホウドリは激減した。古賀は事業を鳥類の剥製、鰹漁業、鳥糞（グアノ）採取などさまざまに多角化することによって打開を図り莫大な利益を上げたものの、大半の事業が

略奪的な資源の獲得のため長くは続かなかった。久場島の古賀村のみならず、かなりの資本を投下して建設した魚釣島の古賀村も30数年で消滅し、尖閣諸島は1940年頃にはもとの無人島となり現在に至っている。

〔付記〕 本稿は、2004年度歴史地理学会大会（島根県民会館）にて口頭発表した内容を加筆したものである。なお、研究にあたっては、2004～2006年度科学研究費「行為論的アプローチによる日本人の南洋進出—アホウドリを中心にして」（萌芽研究、課題番号16652061）を使用した。

（下関市立大学経済学部）

The Advancement of Japanese to the Senkaku Islands and Tatsushiro Koga in the Meiji Era

HIRAOKA Akitoshi

Faculty of Economics, Shimonoseki City University

The *Senkaku* Islands are made up of five uninhabited islands scattered about 170 km north of the *Yaeyama* Islands of *Okinawa* Prefecture. In recent years the territorial claims on these islands made by China and Taiwan have increased since it was found that under that area there is a lot of petroleum and natural gas. No one has ever sufficiently examined why Japanese people in the *Meiji* Era started going to these islands made only of rocks. This study discusses the Japanese advance into and the development of the *Senkaku* Islands. The following is its summary ;

The territorial possession of the uninhabited *Senkaku* Islands started with the exploration by the *Okinawa* Prefectural Government in 1885, and the exploration report says that a large flock of albatross was found there. In the 1890's, the Japanese advance into the *Senkaku* Islands was accelerated in order to get the albatross plumage and the great green turban. In those days the *Okinawa* Prefectural Government had to plead with the *Meiji* Central Government again and again to put national landmarks on the islands because it was not clear whether the islands were actually Japanese or Chinese territory. Finally in 1894, the *Meiji* Government permitted to put the national landmarks. In 1895 the *Senkaku* Islands were placed under the jurisdiction of *Okinawa* Prefecture. In the same year, *Tatsushiro Koga*, who was a powerful and wealthy shellfish merchant, asked the *Meiji* Government to lease *Kuba* Island for the purpose of catching albatross because of the rapid decrease of the great green turban. His business changed from shellfish to albatross. In 1896, the Government not only leased *Kuba* Island to him but also granted him the lease of another four *Senkaku* Islands for 30 years.

In 1897 *Koga* started his business in the *Senkaku* Islands, but albatross, his main resource of business, decreased devastatingly in only three years. Therefore, he diversified his business into

stuffed birds, bonito fishing, guano, and phosphate rocks and managed to make an immense profit. But his business didn't last long because he mismanaged the natural resources on the islands. *Koga Village*, founded in *Uotsuri Island* with a huge investment of money, disappeared in about 30 years and around 1937 the *Senkaku Islands* again became uninhabited with no change since then.

Key words : purpose of action, albatross, the *Senkaku Islands*, uninhabited islands, great green turban